

セッション3. 3

韓国における小児甲状腺がん:最近の調査結果(仮訳)

チョン・ジェフン

成均館大学医学部(ソウル、韓国)付属

サムスン医療院、甲状腺センター、医学部内分泌学・代謝部門

2009年以来甲状腺がんは韓国で最も頻度の高いがんになっており、韓国における甲状腺がんの年間発症例数は2002年の5,299例から2010年の36,021例と急激に増加している。その年間増加率は、他の頻度が高い悪性腫瘍が3.3%であるのに対し、約24%である。他の悪性腫瘍に比べ甲状腺がんの病因として遺伝因子が大きく働くという報告がなされており、韓国を含む東アジアの国民が遺伝的に甲状腺がんを発症しやすいことが知られている。

甲状腺がんは子供にはまれな悪性腫瘍である。小児性甲状腺がん患者は侵襲性の強い臨床兆候を呈すが、良好な転帰が報告されている。最近では韓国においても小児性甲状腺がん(0歳~19歳)の年間発症例数が2002年の80例から2010年の181例と増加している。年齢別の粗率(CR)、すなわち一定の期間における総患者数をその期間内の同年代人口で割って得られる計算値でも、やはり2002年の10万分の0.60から2010年の10万分の1.55と増加しており、この増加は男女ともに見られた。甲状腺がんは、白血病、脳腫瘍、リンパ腫、骨/結合組織腫瘍について第5位の悪性腫瘍であった。2010年における罹病率は粗率で10万分の3.74(男子1.52、女子6.17)であった。韓国健康保険審査評価院発表の小児性甲状腺がんに関するデータによれば、2008年から2012年の間に甲状腺がんと診断された患者762人のうち9人(1.2%)が、その診断以前にすでに他の悪性腫瘍を発症していた。

19歳未満の小児性甲状腺がん患者131人が臨床兆候を評価するためにレトロスペクティブに調査された。彼らは1995年から2013年の間にサムスン医療院において甲状腺切除術を受けている。年齢の中央値は17歳、年齢幅は8歳から19歳までで、113人の女子(86%)が含まれていた。9人(7%)の患者には、第一度近親者に甲状腺がん発症者がいた。患者90人(69%)が触診、16人(13%)が超音波検査、25人(19%)が他の疾患の追跡検査でそれぞれ検出された。6人(4.6%)の患者が、甲状腺がんの診断以前に検出された他の悪性腫瘍のために放射線治療および/または化学療法を受けていた。